

小学校におけるキャリア教育の推進に関する動向と実践上の課題

A practical trend and challenges in promoting career education
in elementary school

吉 武 聡 一

Soichi YOSHITAKE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース

西 山 久 子

Hisako NISHIYAMA

福岡教育大学大学院教育学研究科
教職実践講座

(平成22年9月30日受理)

本論文では、学齢期の児童生徒に対して実施されるキャリア教育の現状をふまえて、文部科学省の施策・小学校におけるキャリア教育の取り組み・実践研究の3点から概観し、その上で義務教育導入段階である小学校でのキャリア教育はどうあるべきかを論考した。そして、理論的観点から小学校における「勤労観・職業観」を整理し、小学校段階においては、「勤労観」の育成を中心とした取り組みを進めていく必要性を確認した。続いて、キャリア教育の推進においては、①発達段階を考慮して各学年をつなぐ、②各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動などの教育活動をつなぐ、③学校・家庭・地域をつなぐ、④子ども・保護者・教師をつなぐ、この4つの「つなぐ」を中心にキャリア教育を進めていくことの重要性について、先行研究をふまえながら論じた。

キーワード：小学校におけるキャリア教育、発達段階、勤労観、つなぐ

1. 問題と目的

今日は、情報化社会、少子高齢化社会の到来、社会経済・産業的環境の国際化、グローバリゼーションの影響による日本の産業・経済の構造的変化、雇用形態の多様化・流動化などを背景として将来への不透明さが増す中、就職・進学を問わず子ども達の進路をめぐる環境は大きく変化している(文部科学省, 2006)。進学はしてみたが、目的意識を持てぬまま「夢を実現しよう」とする意欲も低下し、卒業後もフリーターとして過ごす若者や、就職しても離職してしまう若者が増えている。新規学卒者が3年以内に離職する割合は、中学校卒業者で約7割、高等学校卒業者で約5割、大学等卒業者で約4割になる(文部科学省, 2010)。また、近年はニートとよばれる「働く意志のない若者」も増えており、2009年には15歳から34歳までの非労働力人口のうち、家事も通学もしていない若年無業者は約63万人である(文部科学省, 2010)。そこには、社会人、職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れ、社会の一員としての

経験不足、社会人としての意識の未発達傾向等が見られる(文部科学省, 2010)。

また、環境の変化は子ども達の心身の発達にも影響を与え始めている。1つの例として、身体的には早熟でありながら精神的・社会的な発達は遅れる傾向にあり(岩宮, 2009)、バランスよく発達しているとはいえない。また、人間関係をうまく作れない、自分で自分のことを決定できない、自己肯定感を持ってない、自分の将来を語れない、といった子ども達が増えている(文部科学省, 2010)。これらのことから、これまでの学校の教科教育等で身に付けさせた内容だけでは生きていくための学力が子ども達に十分に身についておらず、進路を選択するときや、社会に出たときに生かされていないといえる。

日本は資源が乏しく、人材こそが国を支える最大の資源であるといえる(若者自立・挑戦戦略会議, 2003)。さらに今後、少子化が進み日本社会全体を支える人口が減っていく中で、一人一人が社会の形成にとって必要不可欠な存在である。そ

れにもかかわらず、仕事・職業を通じて社会を構成し支えていく多くの若者達が自分の将来を描くことができず、自らの社会的な役割を果たしていくために必要な成長を遂げることができなくなってきたという事は、我が国全体においても重大な問題である。

このような状況の中、子ども達が希望を持って自分の力で、自分で考えながら、自分の夢に向かって生きていくためには「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されず、これから先直面するであろう様々な課題に、柔軟にかつたくましく対応していく力と態度を身につけていかななくてはならない(文部科学省, 2006)。そのためには、学校教育の中で学ぶ楽しさ、学ぶ喜び、なぜ学ぶのか、ということ子ども達に感得させることが大切である。子ども達は、まだ知らないことや新しい世界に関心を持ち、仲間と協力して事を成し遂げる喜び、楽しさを味わうことを通して、経験したことの無い新しいことに挑戦する勇気を獲得する。そうすることで、これから先の人生においても、新しいことに挑戦する意欲を持ち続ける基礎を作ることになり、その結果、子ども達が「生きる力」を身につけ、将来、社会人・職業人として自立できるようになるのである。そのためにキャリア教育を推進することが強く求められている(文部科学省, 2006)。

また、文部科学省(2006)は、キャリア発達が段階を追って形成されることについての理解の必要性を指摘している。そのために国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)では、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」を開発した。その中で児童生徒が将来自立した社会人・職業人として生きていくために、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「意志決定能力」「将来設計能力」の「4つの能力」を児童生徒成長の各時期において身に付けることが期待される能力・態度・資質として例示している。つまり、職業観と勤労観を育むキャリア教育は、能力・態度・資質により4つに分類されるということが示されている。職業観は主に将来に向けた進路選択に役立つものであり、勤労観は主に社会人としての生き方に関するものであるといえよう。これらは、キャリア発達を促す視点に立って、将来自立した人として生きていくために必要な具体的な能力・態度・資質として構造化し、例として示している(表-1)。

児玉・深田(2009)は、小学校のキャリア教育活動の傾向を明らかにし、児童の職業的(進路)

表-1 キャリア発達に関わる諸能力(例)

領域	領域説明	能力説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切に行動していく能力
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広い情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力
意志決定の能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		【課題解決能力】 意志決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

(国立教育政策研究所生徒指導センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」から)

発達に関わる諸能力を促進するのに効果的な活動を見出そうとした。そのために各学校での取り組みを調べた結果、職業人から話を聞いたり職場体験を実施したりといった職業に関する調査、つまり「職業観」を取り上げた活動が多いことを報告している。そして、小学校でのキャリア教育による児童の職業的(進路)発達に関わる諸能力に及ぼす効果は、まだ十分明らかにされていないと示唆した。

これまでに述べたことから、キャリア教育には今日の社会が抱える課題が強く反映されていることが示された。それに対応するため、社会適応という具体的な成果をめざし、キャリア教育の指針が再構成された。そしてその結果、職業観・勤労観の2つの観点と、4つの能力の獲得が求められていることが示されたのである。これらの社会的な要請の高まりをふまえ、本論文においては子ども達の発達段階に着目し、小学校におけるキャリア教育のあり方について論考する。

2. キャリア教育とは

キャリア教育とは「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(文部科学省, 2004)において、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ、端的には、「児童生徒

一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義した。

また、同じく「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（文部科学省、2004）の中で、キャリアとは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」であるととらえた。

人は、それぞれの環境の中で生きている。人には、状況や場面ごとにその人なりの立場があり、役割があり、それらは成長とともに変わっていく。人は自分の人生の中で様々な立場に置かれ、その中で役割を与えられ、時には自分から役割を得ながら自分らしく生きていこうとする。文部科学省（2010）は、こうした過程の中で、何のために働くのか、何のために学ぶのか、なぜ生きているのか等々、自分と働くこと、働くことと生きること、自分と生きることを関係付けたり価値付けたりしていき、こうした関係付け、価値付けの累積を「キャリア」としたのである。

また、文部科学省（2010）は、「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」が「キャリア発達」であり、具体的には、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことがキャリア発達の過程である、としている。このキャリア発達は生涯にわたって続くものであり、小学校から中学校、中学校から高等学校、高等学校から大学への進学や、学校から労働社会への就職という大きな環境の移行を円滑に行うためのものである。よって学校では、こうした生涯に続くキャリア発達の流れを促進するために、長期的かつ計画的、段階的な働きかけや支援、援助が必要なのである。

3. 小学校におけるキャリア教育の先駆的な取り組み

生涯において社会的な役割を果たせる人を学齢期から養成することの必要性をふまえて、小学校段階でのキャリア教育の実践的な取り組みやそれに関する論考を概観する。

小田（2006）は、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力を育むために総合的な学習の時間にキャリア教育の実践を行った。「未来の自分に出会う旅」という単元を設定し、プロ野球選手の話の聞いたり、職場体験学習を仕組んだりして、働くことを考えさせた。子ども達は意欲的に活動し、キャリア教育に視点を当てた取り組

みを行った。しかし、これらが実質的な成果をあげるには、他教科との関連や学年を通したキャリア教育プログラムが必要であると推察される。

三村・工藤・千葉（2009）は、キャリア教育準備に着手した小学校の準備から実践への経過を検討し、キャリア教育実践の今後の理論構築と評価研究のあり方について研究した。今後キャリア教育が進展する中で、理論研究が進められると考えられるが、さらにキャリア教育の評価の方法についても数量的評価や質的評価をどのように活用していくかについて、引き続き検討を深めることが重要である。

内藤・朝倉・神山・須本・樽谷（2009）は、「職業観」・「勤労観」を1つの視点として生活科の年間指導計画を作成することを試みた。その生活科の活動の1つが「リアルなごっこ活動」であり、子ども達にとって身近な職業人である先生の仕事を体験させた。「見て分かる」だけでなく「実際にさせて分らせる」という過程を大切に、子ども達は嬉々として活動に取り組む中で先生の仕事の大変さや喜びに気付くことができた。生活科の単元において、「職業観」と「勤労観」を1つの視点として活動を計画する取り組みは、双方の重要性をふまえながらも、それらをまとまりのあるものと捉えることにより、単に一方だけをとりあげることの不自然さを回避できるものとする。

中越（2009）は、子ども達がこれから生き抜いていくために何が必要かを探るために、将来に関する意識調査を行った。その結果から、子ども達が将来に対しての期待が薄く、夢や希望を持つどころか不安を抱えている様子であり、働くことはいやなもので生活するための手段としてとらえ始めていることが示唆されている。しかし、健全に社会適応している人間は、本来社会や人のために働くことに喜びを感じることも多い。にもかかわらず、子ども達が将来への期待・夢・希望の持たない現状は、キャリア教育の取り組むべき大きな課題である。

これらのように、1999年にキャリア教育が生涯にまでも及ぶ生き方の指針を構築するものの1つとして登場し、2004年にその構想が整理されて以来、多くの学校がキャリア教育に取り組み、それらの報告を通して共有化がなされ始めていることが明確になった。それらを見ていると一定の成果はあると思われるが、まだ実践面や効果の検証の面での課題もあり、さらなる研究、実践が必要であるといえる。それらをふまえて、現在のキャリ

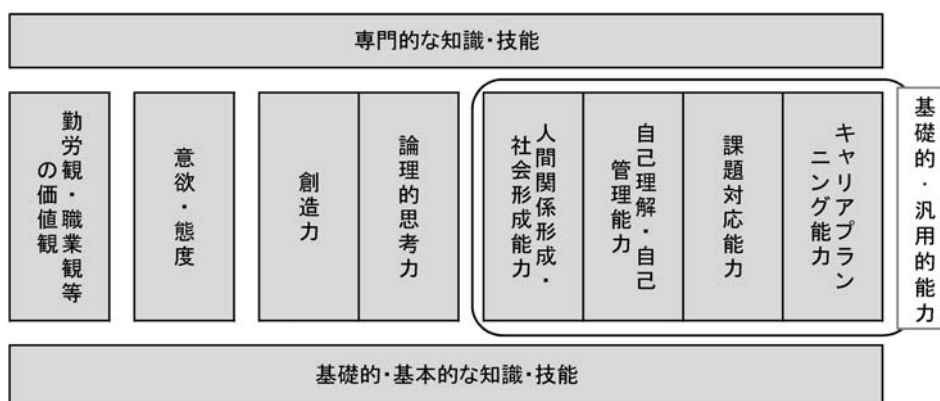


図-1 「社会的・職業的自立，社会・職業への円滑な移行に必要な力」の構成
(文部科学省，2010)

表-2 これまでのキャリア教育とこれからのキャリア教育 (川崎，2010)

	文部科学省(2004, 2008)	中教審(2009, 2010)
はぐくむもの	勤労観・職業観	基礎的・汎用的能力
キャリアのとらえ方	「意識」としてのキャリア	「能力」としてのキャリア
働きかける対象	意欲・態度	知識・技能
目的	キャリア発達	社会的・職業的自立
	これまでのキャリア教育	
	これからのキャリア教育	

ア教育の方向性を理論的側面から整理する。

4. キャリア教育の進化(深化)

2010年5月17日に中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について(第二次審議経過報告)」が、報告された。この中で、前述の「4領域8能力域」を引き継ぐものとして、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」からなる「基礎的・汎用的能力」という新たな概念が提示された。これは、「勤労観・職業観を育てる教育」から「基礎的・汎用的能力を育てる教育」へとキャリア教育が方向転換をしたように思えるかもしれないが、そうではない。これまでの教育が、「勤労観・職業観」の育成のみに偏ってしまったことを指摘し、社会的・職業的自立のためには能力の育成も重要であることを主張しているものであり、決して「勤労観・職業観」が否定されているわけではない(川崎，2010)。

第二次審議経過報告(中央審議会，2010)では、「社会的・職業的自立，社会・職業への円滑な移行に必要な力」に含まれる要素として，①基礎的・汎用的能力，②基礎的・基本的な知識・技能，③

意欲・態度及び価値観，④論理的思考力，創造力，⑤専門的な知識・技能が示されており，③の価値観については「勤労観・職業観等の価値観」が明示されている。「基礎的・汎用的能力」の具体的内容としては、「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理している(図-1)(文部科学省，2010)。このように、「勤労観・職業観」は重要な要素の一つとして位置づけられている。これらのことは、「勤労観・職業観」から「基礎的・汎用的能力」に変わるのではなく「勤労観・職業観」に加えて「基礎的・汎用的能力」を身に付けることが求められているのであり、これからのキャリア教育はより包括的な要素や内容を持ち、社会的・職業的自立へ向けたキャリア発達支援をめざしていかなければならない。つまり、これからは社会的・職業的自立のために児童生徒一人一人の「勤労観・職業観」を育て、その上で必要な知識、技能、態度を育ていかなければならないのである(表-2)。そして、川崎は、2010年度キャリアカウンセラー養成研修基礎講座「キャリア教育の理解 キャリアの理論とその適用」の中

で、キャリア教育の2つの機能として「①生徒と社会をつなぐ、②現在と将来をつなぐ」をあげ「キーワードは『つなぐ』」ことであり、意識としてのキャリア教育から能力としてのキャリア教育へと述べている。それをふまえ、学校が担うキャリア教育を考えると、これからは、「勤労観・職業観」を中心とした子ども達の心の内を育て、社会に出たときに必要な知識、技能、態度を身に付けさせることによって、子ども達と社会をつなぎ、子ども達の過去と今と将来をつないでいかなければならない。そして、学校教育の現場で子ども達のキャリア発達を支援していくためには、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動をキャリア教育の視点でつなぎ、発達段階の違う各学年をつなぎ、小学校と中学校をつなぎ、学校と家庭と地域社会をつないでいくことが重要になってくる。まさしく、川崎（2010）が述べているように「つなぐ」ことがキャリア教育のキーワードとなるのである。

5. 小学校におけるキャリア教育

小学校の児童にとって、社会的・職業的自立を果たすのは発達段階においてはるか先のことである。しかし、小学校段階にいる彼らは現状において抱えている課題に対処したり、克服したりしながら成長して、社会的・職業的自立を果たしていく。したがって、児童が成長して進路選択に直面したときにつまずいてしまう原因の一つは、進路選択に至るまでの過程で、「勤労観・職業観」が十分に育っていなかったと考えられるのではないだろうか。

「勤労観・職業観」を形成するには、自分の得意なことは何か、将来やりたいことは何か等、自分のことを理解していなければならない。さらに、これから進もうとする職業世界や労働についての理解、社会についての理解も必要である。また、自分自身と職業世界や社会との関わり、あるいはつながりを考えるためには、自分の将来像を描くこともできなければならない。つまり、子ども達は一人一人の発達段階に応じて、時間をかけて「勤労観・職業観」を形成していかなければならない（川崎，2010）。したがって、小学校の児童が社会に出て職業と向き合うのはまだまだ先であっても、小学校のころから少しずつ「勤労観・職業観」の基礎を育み、積み重ねていくことが必要なのである。

小学校は、「心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施す

こと」（学校教育法第29条）を目的としており、この時期に身近な人から集団へと人との関わりを広げながら人の役に立つ喜びを感じ、人のために働くことの意義を理解し、自分の役割を進んで果たそうとする態度を育成していく（文部科学省，2010）。また、子ども達は日常生活や学習において自分の目標を立て、その目標に向かって努力して達成しようとしたり、自分のよいところを見つけて伸ばそうとしたりしながら希望を持って歩んでいく。そうして、社会生活の中での自らの役割や、働くこと夢を持つことの大切さを理解し、興味・関心の幅を広げ自分やまわりの人へ積極的に関わるなど、キャリア教育を通して社会性、自主性・自律性、関心・意欲等を育てていくことが重要である（文部科学省，2010）。そのために、文部科学省が示すように、各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動や日常生活において、統合されたキャリア教育の実践が重要となる。例えば、清掃活動や係活動などの特別活動や地域の探検、身近な人の仕事調べ、商店街での職場見学など地域社会と関わる生活科、総合的な学習の時間などを通して「働くこと」「人の役に立つこと」の大切さを感じ、自分が「できること」「したいこと」を見つけて行動していきながら、意欲的に学ぶ姿につなげていかなければならないのである。

6. 小学校における勤労観・職業観の育成

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）は、職業観、勤労観について次のように示している。

職業観：人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識である。

勤労観：勤労に対する価値的な理解である。職業としての仕事や勤めだけでなく、ボランティア活動、家事や手伝い、その他の役割遂行などを含む、働くことそのものに対する個人の見方や考え方、価値観であり、個人が働くこととどのように向き合って生きていくかという姿勢や構えを規定する基準となるもの。

また、三村（2008）は、これまでのキャリア教育の実践が過度に職業理解に傾いている現実があることをふまえ、勤労観、職業観を若干捉え直して小学校のキャリア教育の展開を容易にするために、図-2のような構造図を提案した。



図-2 勤労観と職業観の構造図
三村(2008)「新訂キャリア教育入門」

勤労観：日常生活の中での役割の理解や考え方と役割を果たそうとする態度、および役割を果たす意味やその内容についての考え方(価値観)

職業観：職業についての理解や考え方と職業に就こうとする態度、および職業を通して果たす役割の意味やその内容についての考え方(価値観)

この三村(2008)の考えのもと、子ども達の学校生活において「勤労観」「職業観」に関わる活動を列挙して図-3に表した。このように整理してみると、勤労観に関わる活動は、授業中の活動だけでなく、学校生活全般にわたっていることが分かる。一方、職業観に関わる活動は、職業に直接関わる学習がほとんどであり、より具体的に職業上果たす役割について学ぶ活動である。このように見ると、三村(2008)が提案しているように、勤労観が職業観を支える内容になっており、勤労観の育成が職業観の育成に大きく影響しているのが分かる。このことは、小学校では勤労観を育む取り組みを中心にキャリア教育を進めていくことの根拠になると考える。

先行的な研究として、発達段階ごとの職業認知の構造を、希望職業と職業遂行予測から検討した研究が行われている。森本(1985)は、職業的発達の著しい児童を対象に、空想期、興味期を考慮した主観的な職業選択と、中学1~2年で迎えるであろう能力期を考慮した客観的な職業選択を手がかりとして、2つの方向から児童の職業認知の構造を明らかにした。

浅野・伊藤(2009)は、小学校におけるキャリア教育の現状として先進校が発表した実践事例を集約してみると、限定された領域、特に社会科、生活科、総合的な学習の時間や道徳が圧倒的に多いが、キャリア教育は学校の教育活動全体を通して行われるべきである、と主張している。そして、浅野が考案したキャリア教育プログラムを約1ヶ月実践しその結果から以下の示唆を導き出している。①児童が親しみを持てる環境設定、②児童が達成感を持てる活動、③教師が児童によさや成長を伝える、④様々な出来事を振り返る、⑤活動は単純明快に行う、⑥気持ちを心の外に出す活動を行う、⑦教師が手本になる。これらは、学校の日常生活全般にわたる勤労観に関わる取り組みであり、小学校において勤労観を育てる取り組みの重要性を示唆している。

小学校で勤労観・職業観を育むためには、学校での日常の生活の積み重ねを大切にしなければならない。前述のようにキャリア教育は包括的なものであり、全教育活動を通して推進していくことによって、「勤労観・職業観」や「基礎的・汎用的能力」を育てることができるのである。そのため、学校における毎日の生活に位置づけられた活動によってキャリア教育を遂行できるよう、個々の活動をつないでいかなければならない。

渡辺(2008)は、「イチロー選手が小学生の質

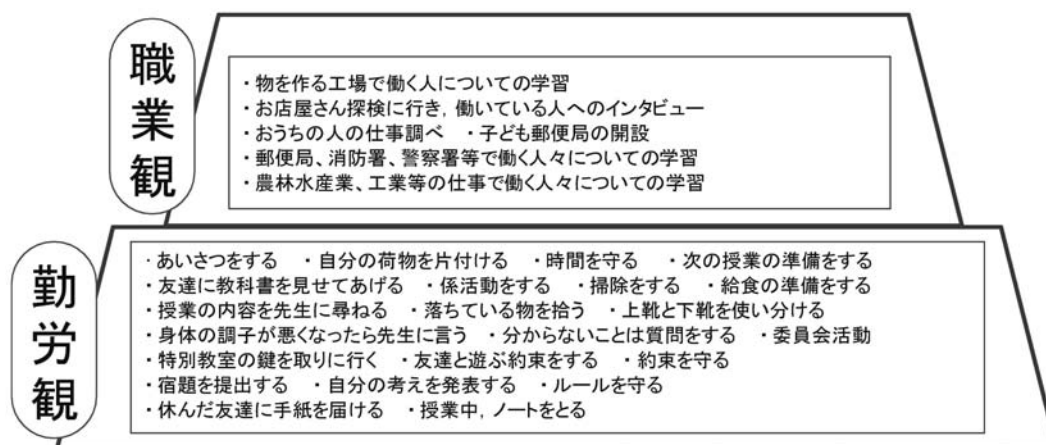


図-3 勤労観、職業観に関わる、子ども達の活動の分類

問に答えたときのことで。－中略－小学生からの『小学生の時どんな練習をしたらいですか?』という内容の質問に対して、イチロー選手は、『君は毎日宿題をきちんとしていますか?』と問い直しました。そして、『学校の勉強が一番大切です。』ときっぱりと言ったのが印象的でした。－中略－しかしいずれにしても、イチロー選手の児童に対する姿勢と行動は、キャリア教育の理想的な実践だと思えます。－中略－イチロー選手は、もちろん毎日バッティング練習を欠かさなかったでしょう。しかし、今のイチロー選手のキャリアを築き上げたのは、バッティング練習の積み重ねではなく、『毎日すべきことをきちんとおこなう』『小学生としてすべきことをきちんとおこなう』という経験の積み重ねを通して育んだ自己管理能力と意思決定能力なのだと思います。』と、述べている。つまり、小学校生活においてやらなければならないいけないこと、やろうと思うこと等、毎日の生活のすべてを大切にできちんとしていくことが子ども達の「勤労観・職業観」を育むことになるのである。

これらのことからキャリア教育では、「勤労観・職業観」を育むために、必ずしも新しい取り組みをしなければならないということではないということが言える。大切なことはこれまでの活動を全職員でキャリア教育の視点で幅広く見直し、それを全職員が共通理解して、学校現場において系統的・組織的に取り組んでいくこと、つまり、「つなぐ」ということである。

7. 「つなぐ」をキーワードにして

キャリア教育を推進していくために「つなぐ」をキーワードにして、今後の取り組みについて考える。

(1) 発達段階を考え1年生から6年生までをつなぐ

国立教育政策研究所生徒指導センターは「自分に気付き、未来を築くキャリア教育(2009)」の中で低・中・高学年の発達課題を以下のように記している。

- 低学年 ①小学校生活に適応する。
②身の回りの事象への関心を高める。
③自分の好きなことを見つけて、のびのびと活動する。
- 中学年 ①友だちと協力して活動する中でかわりを深める。
②自分の持ち味を発揮し、役割を自覚する。

- 高学年 ①自分の役割や責任を果たし、役に立つ喜びを体得する。
②集団の中で自己を生かす。
③社会と自己のかかわりから、自らの夢や希望をふくらませる。

これらの発達課題にそって各学年で取り組んでいくわけだが、その際、各学年が自分達の学年の実態だけを考えて取り組んでしまうと各学年の取り組みがばらばらになってしまうので、各学年のつながりを意識しながら取り組まなければならない。例えば、低学年で「係や当番の仕事に取り組み、その大切さを感じる」、中学年で「係や当番活動に積極的に関わる」、高学年で「自分の役割の必要性を理解して、責任をもって役割を果たそうとする」というつながりを意識して取り組まなければならないと考える。

三村(2004)は、すべての児童が同じペースで発達を遂げているわけではなく、キャリア発達については個人差が大きく、また、その差が多様であることを常に意識しておく必要がある、と述べている。また、キャリアに関わる発達段階は個人差が大きく、多様である。そのため、単に形式的に学年間のつながりだけで考えるのではなく、児童一人一人の発達段階に応じた個別の発達のつながりに配慮することも重要である。

よって、小学校でのキャリア教育の推進のためには、1年生から6年生までの発達段階に基いて学年間をつなぐことと、児童一人一人の発達段階の個人差に配慮して発達段階をつなぐということ意識しなければならない。

(2) 各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習・特別活動をつなぐ

キャリア教育を教科に取り入れる先駆的取り組みが報告されている。久保田・塚目・榎本(2006)は小学校におけるキャリア教育として、理科教育の中で現場で活躍している職業人を招き、話を聞く機会を設けた。この体験により、子ども達の職業観に対して有効な成果が得られたこと、加えて彼らの勤労に対する態度にも影響があったことを報告している。しかしながら、キャリア教育において、小学校段階では勤労観の醸成を優先事項としていることから、このような取り組みを取り入れながら、より具体的な子どもの日常的な活動に関係つけたキャリア教育を取り入れることが重要であると考えられる。

また、橋本・若木(2008)は現在の小・中学校のキャリア教育の実態を調査し、分析を行った。その結果、児童・生徒は職場体験学習に対して、

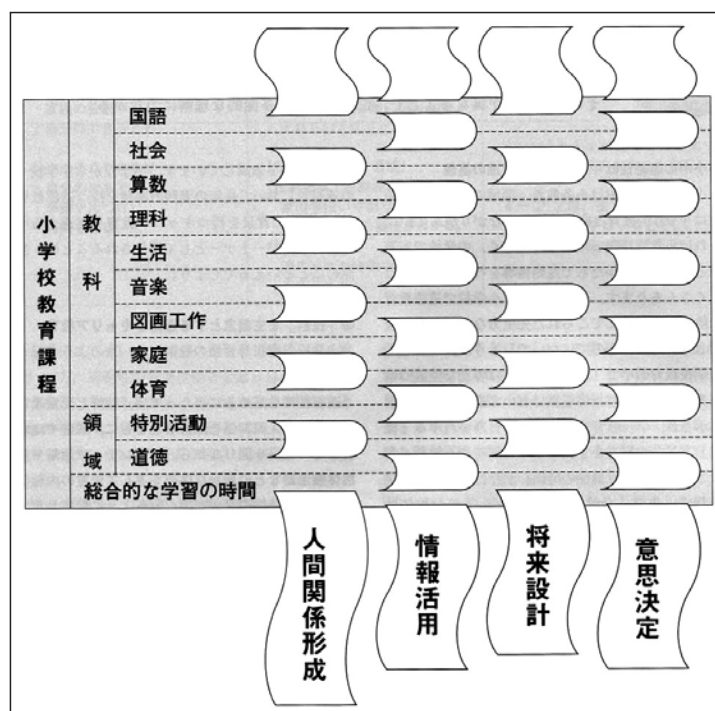


図-4 教科・領域とキャリア教育の4つの能力領域は、「縦糸」と「横糸」の関係
(三村, 2004)

意義あるものと捉えてはいるものの体験時間や職種に不満を持っていることや、小学校から中学校への連続したキャリア教育が実施されていないことが明らかになった。そこで、小・中学校に共通な総合的な学習の時間の活用を提案し、小学校でのキャリア教育の在り方を探った。その結果、小学校段階でのキャリア教育の推進において課題が示唆された。これらのことから今後、徐々にではあるが児童が着実に職業を考えることができる小学校6年間を通したカリキュラムの編成と、教科単独による実践ではなく、全教育課程の連携を図りながら取り組んでいく必要がある。

文部科学省(2010)は、「キャリア教育は、それぞれの学校段階で行っている教科・科目等の教育活動全体を通じて取り組むものであり、一中略一日常の教科・科目等の教育活動の中で育成してきた能力・態度について、キャリア教育の視点から改めてその位置付けを見直し、教育課程における明確化・体系化を図りながら点検・改善していくことが求められる。」「また、各教科等における取り組みは、単独の活動だけでは効果的な教育活動にはならず、取り組みの一つ一つについて、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それを適切に結びつけたりしながら、より深い理解へと導くような取り組みも併せて必要である。」と述べている。つまり、キャリア教育を効果的に推

進していくためにはある教科単独で取り組むのではなく、キャリア教育の視点ですべての教育活動を見直し、なおかつ各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動を適切につなげながら、より深い理解へと導いていかなければならないのである。特に、小学校では学級担任が複数の教科指導をはじめとして、大半の指導を担当するため、担任の工夫次第で各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動の各領域を関連づけながら取り組んでいける可能性が充分にあるといえる。(三村, 2008)。

一方、担任に工夫を求めることに対して、しばしば学校現場では「時間がない」という声を聞く。時間がないからこそ各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習・特別活動をつないでいくことが必要となる。小学校の教育活動の中には、キャリア教育に関わる要素がたくさん含まれており、それらを見直し、つなげていくことにより限られた時間の中でも効果的にキャリア教育を進めていくことができるのである。

例えば、「人間関係形成能力」の一つに「他者と協力して学び合う力」がある。この能力は、国語や社会、理科、算数等々どの教科においても必要な能力である。国語の時間にグループで話し合い、協力して取り組んだ力は、理科の実験で協力して取り組むことに生かされるはずである。つま

り、各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動のそれぞれの活動をキャリア教育の4能力領域によってつないでいくのである。そのことを表したのが図-4である。三村(2004)は、学習指導要領の各教科及び領域、総合的な学習の時間に対し、キャリア教育が機能的にどのように働くかを図示した概念モデルを提示した。三村によると、学校教育でキャリア教育を推進することは、教育課程に示されている各教科・領域等と職業観・勤労観を育む「学習プログラムの例」に例示された4能力領域が互いに補完し合い、相乗効果的な効果を生み出すことになるという。三村はそれを横糸と縦糸が編み込まれた布地を作り上げていくイメージにたとえたのである。

こうした体系的整理によって、各教科、領域それぞれの活動の中をつながりだけでなく、それらの活動をキャリア教育の視点で見直し、4能力域でつなぐことができる。そうして、キャリア教育が有機的に機能するようになり、限られた時間の中でも進めていくことができるようになるのである。

(3) 学校、家庭、地域をつなぐ

キャリア教育は、一人一人の生き方に関わる教育であり、一人一人の成長の過程における様々な経験や、接してきた多くの人々とのつながりなどが総合的に関わってキャリアが形作られる。そのため、キャリア教育を推進していくためには、学校が児童の生活の基盤である家庭と積極的に連絡を取り、ともに連携・協力をしていかなければならない。また、キャリア教育を十分に広げていくためには、家庭との連携だけでなく、地域や関係機関等との連携も必要不可欠である。学校外の教育資源を発掘して有効に活用しながら、子ども達が望ましい勤労観・職業観を育ていけるよう、

また、将来に向けて主体的に進路の選択や決定ができるように指導したり、支援したりできるように共通理解を図ることが必要である(文部科学省, 2010)。

家庭は、子ども達の成長を支える最も重要な場であり、家族との関わりの中で父親、母親の働く姿を見たり、子どもが家庭の仕事の一部を担う経験をしたりすることによって、様々な職業の実際や仕事には困難もあるが大きなやりがいもあることを感じ取らせることができる。また、家庭の生活基盤である地域社会において子ども達が経験する人間関係や地域の活動における経験によって、子ども達は社会性を身に付け、「生きる力(文部省, 1996)」の基盤を形作るのである。このとき、地域社会に対する保護者の考え方や態度は子ども達の人格形成や心身の発達に大きな影響を及ぼす。かつての日本では、日常生活の中で保護者の働く姿を見て、多くのことを学びながら成長することができた。しかし、今日においては、核家族化や価値観の多様化等によって家庭生活の様相も変わってきており、子ども達が家の手伝いをする経験も少なくなってきた。

一方、地域は、もともと子ども達が同年齢のみならず、異年齢の子ども同士で自由に遊び、活動できる場であり、子ども達が様々な人間関係を体験できる場でもある。これらの経験は、子ども達のキャリア発達に大きく影響してくることを考えると希薄な関わりに何らかの対策を講じ、地域においてもキャリア教育を進めていくことが求められるのである。

文部科学省(2006)は「キャリア教育推進のための家庭・地域等との連携の在り方」として、家庭や地域との関わり方について、具体的に以下のように示している。

表-3【家庭・地域が学校と連携して協力できること】(文部科学省, 2006)

<ul style="list-style-type: none"> ・しつけ、子どもへの接し方 ・働くことを通じての家族の会話 ・社会人講師による体験学習 ・幼児、高齢者、生涯のある人々との触れ合い体験 ・上級学校の教員による模擬授業、出前授業 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭における役割分担 ・職場訪問、職場体験、インターンシップ ・卒業生や地域の人々の体験談を聞く会 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業人による講演会
---	--	--

表-4【学校が家庭・地域に向けて発信できること】(文部科学省, 2006)

<ul style="list-style-type: none"> ・学校だより、進路だより等による啓発 ・行事公開 ・三者面談、進路相談 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者会 ・家庭教育講演会 ・キャリア教育講座、講演会 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業公開 ・進路説明会 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級懇談会、地区懇談会
---	---	---	--

表-5 【子ども達が家庭、地域の中でできること】（文部科学省、2006）

- | | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・家庭における役割分担，家事分担 ・職場見学，職場体験，インターンシップ ・保育体験，福祉体験 | <ul style="list-style-type: none"> ・街中探検，社会科見学 ・ボランティア活動 ・自治会や公民館の活動 ・お祭り等地域行事への参加 | <ul style="list-style-type: none"> など |
|---|--|--|

このように、学校と家庭、地域をつなぎ、パートナーシップを発揮して互いにそれぞれの役割を自覚し、一体となった取り組みを進めることが今後ますます重要になってくる。

(4) 子どもと保護者と教師をつなぐ

子ども達の教育を進めていくには、キャリア教育を進めることだけに限らず保護者の理解が必要である。保護者が担任の取り組みを理解し、担任が保護者の思いを受け止め、ともに子どもを育てていこうとする姿勢を共有することが必要である。

また、子ども達と教師の間にしっかりとつながりができ、信頼関係ができて落ち着いた学級になることが、キャリア教育の推進の基盤となる。文部科学省（2006）は、「教員は、児童一人一人の理解に努め、人間関係を築くなかでキャリア発達の個人差を認識し、個々の児童に応じた指導に当たることが望まれる」としている。そのためには、キャリアカウンセリングを適切に行っていかなければならない。このキャリアカウンセリングは、子どものキャリア発達を支援するための個別の援助のことであるが小学校段階においては、児童のさまざまな体験活動における思いや気づきを受容的態度と共感的理解を基礎に、「観る・聴く・受け止める」というコミュニケーションを積極的に行っていくための方策であるととらえる（三川、2008）。

そして、当然のことながら子ども達はしっかりとした、安定した親子の関係の築かれた家庭があって初めて落ち着いて家庭の外に出て行き、そこで友達をはじめ多くの人と関わりながら、様々な活動に取り組むことができる。

つまり、子どもと保護者と教師の三者がしっかりとつながり、このトライアングルの関係を安定させることができ初めて、子ども達はのびのびと成長することができる。そのために、教師は、家庭訪問を行ったり、学級通信を書いたり、子ども達に分かる楽しい授業を創造したりして、常にこの三者の連携を強くしっかりと維持していかなければならないのである。

8. キャリア教育の課題

1999年に中央審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、初めてキャリア教育が登場して以来、小学校、中学校、高等学校、大学と多くの教育現場でキャリア教育が実践されてきた。その中で、本田（2009）は「キャリア教育が若者に及ぼす影響」として、次のような警鐘を鳴らしている。

『『キャリア教育』は、若者の『勤労観・職業観』や『汎用的・基礎的能力』を高めるという結果をもたらすよりも、そうしたプレッシャーのみを強めることによって、むしろ若者の不安や混乱を増大させてきた可能性が強いという事である。望ましい『勤労観・職業観』や『汎用的・基礎的能力』の方向性は掲げながらも、それを実現する手段を具体的に提供することなく、結局は『自分で考えて自分で決めよ』と、進路に関する責任を若者自身に投げ出すことに終わっているのが現在の『キャリア教育』なのではないか。将来につながる具体的な手段や武器を若者に与えることが疎かにされていることに対して、筆者は強い危惧を覚える。』『『キャリア教育』は、若者の進路選択や働き方、生き方に関するあらゆる理想を含みこむような無限定さのために、『キャリア教育』を面と向かって批判することは難しい。しかし、学校現場の教師にとっては、『キャリア教育』は雲をつかむように曖昧で、かつ大きな負担を伴うものと感じられている。実際の『キャリア教育』は、具体的活動としては職業体験や講演会などが単発的・断片的に行われるにとどまる一方で、『自分で考えて自分で決めよ』という規範や圧力のみが高まる結果になっている。そうした圧力は、若者を、『決められない』ことへの不安や、華やかで流行りだが実現しにくい『夢』へと駆り立てるように作用している。このような『キャリア教育』の現状を総体として見るならば、果たしてそれはよいことだといえるのか、大きな疑問が残る。』

この本田（2009）の論では、「キャリア教育」の概念そのものを否定しているのではなく、「勤労観・職業観」に象徴されるように「こうあるべきですよ」「こうした方がいいですよ」という観念的なことばかりで、実際に若者が進路を選択

する際に、具体的な方策、手がかりを示していないことが問題であるとしている。たしかに、文部科学省が提起してきたこれまでの内容には、具体的な方策が乏しい。しかし、文科省の提起してきた「キャリア教育」について、多くの学校現場や学者がその内容をかみ砕き、学校現場で具体的な形になるように実践を積み重ねてきている。その課程で、本田（2009）が述べているように、まだ、キャリア教育の効果が十分に表れていない、時にはマイナスになっている状況があるのも事実であろう。しかし、そうであるならば、今後、キャリア教育がその本来の目的を達成することができるように学校現場における取り組みを見直し、若者が進路を選択するときに具体的な方策、手がかりを持つことができるような取り組みを創造していかなければならないと考える。

本論文では、小学校のキャリア教育について述べてきた。小学校段階ではまだ、社会的・職業的自立を果たすための進路選択を行うまでには時間があるが、小学校から少しずつ「勤労観・職業観」の基礎を育み積み重ねていかねばならない。その過程で、子ども達の中で「勤労観・職業観」の観念論だけが大きくなってしまい、本田（2009）が述べているような『やりたいことが分からない』という不安を募らせ、他方でやりたいことが見つかった者の場合は『それが実現できるかどうか分からない』という不安を募らせてきた。若者に育ってしまわないような「キャリア教育」の取り組みを実践して行かなくてはならない。現時点では、確かにまだキャリア教育の考えが学校現場に正しく浸透しておらず、現場の教師も「キャリア教育」と聞いてどうしたらいいか分からないという状況があるのは確かかもしれない。しかし、この10年間文部科学省が中心になって進めてきたキャリア教育を、これからは学校現場が中心になって具体的な実践を通して進めていくことによって、本田（2009）の述べている「若者が自分自身と世の中の現実とをしっかりと摺り合わせ、その摩擦やぶつかり合いの中で、自分の落ち着きどころや目指す方向を確かめながら進んでゆくこと」のできる若者を育てていくことができるはずである。

9. おわりに

本論文では、今日までのキャリア教育を概観し、現状をふまえて小学校におけるキャリア教育は、どうあるべきかを考えた。そして、先行研究もふまえてこれからのキャリア発達を支える基礎部分を構築しなければならない小学校においては、全

教育活動の中で、まず勤労観を育てていくことが必要だと考えた。そのためには、①発達段階を考えて各学年をつなぐ、②各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動をつなぐ、③学校、家庭、地域をつなぐ、④子どもと保護者と教師をつなぐ、という4つの「つなぐ」が重要であるという立場で論考を進めた。

キャリア教育という言葉が学校現場に登場してから10年が過ぎ、全国で様々な実践が行われてきている。しかし、キャリア教育の課題も見えてきている。本田（2008）が述べているように、現状を見ると必ずしも文部科学省が提唱する方針が尊重されておらず、「自分で考えて自分で決めよ」と責任を若者自身に投げ出すだけになり、プレッシャーばかりが強くなって、むしろ若者の不安や混乱を増大させてしまっている現状があることも否定できない。

しかし、だからこそ、卒業時の進路選択におけるキャリア教育だけでなく、小学校段階におけるキャリア教育が重要になってくると考える。児美川（2006）は、「小学校段階の子ども達にふさわしい人間的成長と発達を促すためのさまざまな教育活動が、結果としては、子ども達のキャリア発達の豊かな土台を作ることになるし、勤労観や職業観の形成の基礎を作ることになるという関連性が深く意識されるべきであろう」と述べている。いろいろなことを素直に純粋に吸収していく小学校の子ども達であるからこそ、教科の枠を超えた全教育課程の中において、現代社会で失われてしまった子ども達の様々な体験を仕組み、経験させていくことによって、「勤労観・職業観」「基礎的・汎用的能力」が育っていくと考える。その際、三村（2008）の提案した「勤労観と職業観の構造図」にあるように、勤労観が基盤となり、その上に職業観が形作られていることを考えると、小学校段階では、まず勤労観を育てるところから始めるべきであろう。

今後は、「発達段階」「勤労観」「つなぐ」をキーワードにして小学校におけるキャリア教育の実践に取り組み、子ども達が進路選択に直面したとき、自分に自信を持って選択して進んでいけるような力とは何であるかを詳細に検討し、その基礎を築いていかなければならない。

引用文献

- 愛知県総合教育センター 2006 研究紀要第96集
- 浅野信彦・伊藤友美 2009 小学校におけるキャリア教育の現状と課題—実践からの示唆— 文教大学教育学部「教育学部紀要」 43, 12-23
- 福岡県教育センター 2009 学びを作り出すキャリア教育
- 橋本建夫・若木容子 2008 総合的な学習とキャリア教育に関する一考察 長崎大学教育学部紀要, 教科教育学 48, 23-37
- 本田由紀 2009 「教育の職業的意義」 ちくま新書
- 岩宮恵子 2009 「フツの子の思春期」 岩波書店
- 川崎友嗣 2010 「小学校での勤労観・職業観を育てる教育の指導の工夫」 初等教育資料8月号 東洋館出版社 10-15
- 児玉真樹子・深田博己 2009 小学校におけるキャリア教育の実践—平成16年度, 17年度, 18年度キャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修の資料の分析— 広島大学心理学研究 8, 209-225
- 国立教育政策研究所 2002 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)(<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>)
- 国立教育政策研究所生徒指導センター 2009 自分に気付き, 未来を築くキャリア教育
- 児美川孝一郎 2006 日本における「キャリア教育」実践の展開(1)—小学校におけるキャリア教育をどう進めるか— 法政大学キャリアデザイン学会紀要 3, 49-66
- 久保田善彦・塚目瑞穂・榎本和生 2006 小学校理科におけるキャリア教育の実践と課題—小学校5年生「植物の発芽と成長」における職業人との交流から— 日本理科教育学会北陸支部大会発表要旨集
- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために— (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf)
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/_icsFiles/afieldfile/2010/03/18/1251171_001.pdf)
- 文部科学省 2010 小学校キャリア教育の手引き
- 文部科学省 2010 初等教育資料8月号
- 三川俊樹 2008 「役立つ喜びを味わう」 児童心理2008年2月号 金子書房 72-78
- 三村隆男 2004 「図解 始める小学校キャリア教育」 実業之日本社
- 三村隆男 2008 「新訂 キャリア教育入門」 実業之日本社
- 三村隆男・工藤榮一・千葉高 2009 わが国小学校におけるキャリア教育の導入過程研究 早稲田大学大学院教職研究科紀要 創刊号 27-40
- 森本昭憲 1985 児童の職業認知構造—希望職業と職業遂行予測から— 進路指導研究: 日本進路指導学会研究紀要 5, 16-22
- 内藤博愛・朝倉淳・神山貴弥・須本良夫・樽谷秀幸 2009 生活科におけるキャリア教育の構築Ⅲ 広島大学 学部・付属学校共同研究機構研究紀要 37, 325-330
- 中越敏文 2009 小学校におけるキャリア教育の必要性に関わる研究 愛知教育大学研究報告, 教育科学編 58, 179-187
- 小田哲也 2006 子どもが生き生きと取り組む総合的な学習の時間を求めて—キャリア教育の実践を通して— 日本科学教育学会研究会研究報告 21(3), 27-32
- 若者自立・挑戦戦略会議 2003 若者自立・挑戦プラン
- 渡辺三枝子 2008 「キャリア教育—自立していく子どもたち」 東京書籍